文 化 財 学 習 会

ふ る さ と 探 訪

テーマ　三谷石舟古墳周辺を訪ねる

講　師　山本　英之

（高松市文化財専門員）

1　古代高松の玄関口「三谿」

三谷の地名は、十世紀の前半に成立した延喜式の中に、讃岐国山田郡の十一郷のうちの一つとして、また、古代律令制のもとで整備された古代南海道の駅名としてもすでにその名が見えています。古代南海道は、都から紀伊、淡路、阿波、讃岐、伊予、土佐へと延びていた官道―都と国府の間で情報や軍隊を迅速に送るための幹線道路―で、道路が通過する諸国を束ねた地方行政区分の名称でもあります。

大坂峠を越えて讃岐に入った南海道は、讃岐平野をほぼ東西に横断し、引田駅、松本駅を経て高松平野南部の三谿（三谷）駅に至ります。現在の十河小学校南辺から川島小学校北辺へ抜けて川島橋へ至る道路は古代南海道のコースに一致する古道と言われています。三谷地区は、まさに古代の高松平野の玄関口といえ、それにふさわしい古代遺跡が多く残された地域でもあります。

2　高野廃寺

山田支所から南西へ三百メートルほどの地点に祀られている丹生神社は、『香川県神社誌』によると、「川島町大字高野字前浴に所在する西植田村村社合祀神社（池田合祀神社）の境外摂社で、別名を高野明神。於加美（おかみ）神を主祭神、市岐島媛命（いちきしまひめ）、火産霊（ほむすび）神

を合祀祭神とする」とされています。丹生明神は水銀生産をつかさどる神で、空海が高野山開創のときに丹生都比売（にゅうつひめ）（丹生明神）からその地を譲り受けたという伝説が残されていることから、高野明神とともに高野山の地主神として祀られています。

江戸時代の後期に現在の香南町横井に生まれた儒学者、中山城山が著した『全讃史』には、里人の言い伝えとして、この地には古くは七堂伽藍があり丹生明神が祭られていたことから高野原という地名がつけられたこと、天正年間（一五七三～九二）に長宗我部元親の兵火に焼かれて祠だけが残されたこと（城山は、長宗我部の焼討という里人の言葉を信用していない）などの記事が見られます。

高野廃寺で採集された瓦の拓本

丹生神社の東側約百メートルにも小さな祠が祀られており、この小祠の周辺では土師器や須恵器片の散布が報告されています。丹生神社の南側から小祠の辺りにも方形の土檀状の地形がみられるなど、古代寺院の存在をうかがわせる証拠が多く残されていることから、高野廃寺として報告されています。丹生神社社殿西側の灯篭の台座には、寺院の礎石であったと推定される加工痕のある石材が転用されています。

3　漆原千賀之助の碑

三谷の旧家である漆原家は、もとは香川郡川東村から出たと伝え、中世には讃岐守護細川家、近世には生駒家に仕えた武士でしたが、松平氏の藩政となってからは牢人として三谷村ほか山田郡内の民政を預かりました。三谷町通谷の漆原家は大本家と称し、江戸時代の半ばに分かれた大満漆原家や西三谷漆原家、それらの分家の総領家として重きをなし、三谷村政所、山田郡大政所の要職も度々勤めています。

この漆原大本家から出て、幕末から明治にかけて活躍した武道家が漆原千賀之助です。以下、その経歴を『三谷郷土史』から抜粋します。

漆原千賀之助の碑

【漆原千賀之助】　通谷漆原家の出身、父は漆原元八郎、文政九年（一八二六）七月二十四日生。早くから直心影流剣法を吉田又三郎について学び、天保十五年（一八四四）若干十九歳で目録（窮理の巻）の伝授を受け、その後郷関を出て播州赤穂に遊び、中村清右衛門に従って種田流の創術を学び、嘉永元年（一八四八）正月、二十三歳の時その伝授目録を受けたが、その技を一層磨くために江戸へ行き、平田重兵衛に師事し、

嘉永三年二月、二十五歳でその免許を受けて技もいよいよ上達し、嘉永五年四月、二十七歳の時には十二代将軍家慶公の午前試合で槍賞を賜る光栄に浴している。

その後郷里三谷に帰ったが、幕末高松藩の海防要員として父、漆原元八郎と共に、その名を連ね、元治元年（一八六四）十一月長州征伐に際して高松藩主の命で、槍隊を編成して従軍し翌、慶応元年四月帰国の際は記念章として葵紋の入った杯を頂戴の外、後、連枝松平大膳殿の書幅を賜った。

維新後廃藩置県になるまで同じ三谷出身の漆原完平と共に無禄のまま高松藩庁に勤めたが、その後は門弟をとり、闘技を教えた。・・・明治四十年（一九〇七）三月十一日、天寿を全うし八十二歳、武術家としてその生涯を終えたのである。墓は竹林墓地にあり、また、松平頼壽伯の篆額になる記念碑が原に建設されている。碑は村尾景経の撰文で、書は門人十河の松原弥三七始め門弟の特志によっている。（以下略）

4　藤川三渓の碑

藤川三渓は三谷出身の儒学者、医者であるとともに幕末は尊王活動家として活躍しました。明治に入ってからは、近代捕鯨技術を導入した捕鯨事業を始めわが国の近代水産業の確立に大きな役割を果たしました。

三渓は文化十三年（一八一六）に讃岐国山田郡三谷村に生まれました。父、南凱も儒医。南凱を養子に迎えた同族の藤川東園は、大坂に古文辞学を広めた菅甘谷の下で学んでいますから、東園はいわば荻生徂徠の孫弟子に当たります。後の中山城山を育てた人でもあります。

山田郡潟元村長崎之岬旧砲台見取図（個人所蔵）

三渓は、十六歳で父親を失い天涯の孤児となりますが、中山城山に入門して勉学に励む一方で武術の鍛錬にも余念がありませんでした。天保十二年（一八四一）、二十六歳にして長崎に遊学し、高島秋帆の門下となって西洋砲術を学びます。このときに、秋帆によって銃殺捕鯨術や遠洋漁業についての知識も習得しています。二年の長崎遊学を終えて帰郷の後は、諸国を遊歴して学問や詩作の研鑽に励む一方で尊攘派の志士たちとの交わりをも深めていきました。文久三年（一八六三）、攘夷の詔勅の気運を受けて高松に帰り、長崎ノ鼻砲台の建設や農兵組織である龍虎隊の創設を藩に建策しました。しかし、八月十八日の政変により急

進的な攘夷論が鳴りを潜めると藩論も佐幕に転じ、三渓らは鶴屋町の獄舎に投獄され王政復古までの六年間を獄舎で過ごしました。

高松藩朝敵事件の後に出獄した三渓は、京に上って奥羽列藩征討軍に身を投じ、征討軍の劣勢を挽回すべく奥州諸藩の説得や増援部隊の派遣を成功させるなど奥羽戦争終結に大きな役割を果たしました。

その後、奥羽戦争の功労者として明治政府へ出仕し、明治十三年（一八八〇）に六十五歳で官を辞したのちは水産業の利益に着目して、捕鯨会社や水産学校の設立に尽力します。既に、明治六年に様式捕鯨法を導入した捕鯨会社を設立して小笠原諸島周辺での捕鯨事業を計画しており、晩年には大日本水産学校、大阪水産学校を相次いで設立しました。明治二十二年、大阪にて病没。

その後、彼の業績は長く忘れられていましたが、関係者の運動により大正四年に正五位が進贈され、一族が眠る墓所の一角に記念碑の設立が成り現在に至っています。本年の十一月には、没後百二十年を記念した式典と銅像の序幕がこの碑の下で挙行されるということです。

藤川三渓が著した「水産図解」の中表紙と内容

5　三谷石舟古墳

《立地と古墳の形状》

三谷石舟古墳は、上佐山から北に延びる低い丘陵部の先端、三谷町字竹林に所在します。西方四百メートルには三谷三郎池。古墳は、後円部を東北東に向ける全長八十八メートルの前方後円墳で、高松市域では石清尾山猫塚（九十六メートル、双方中円墳）に次ぐ大きさ。県下でも富田茶臼山古墳（百三十九メートル、前方後円墳）、快天山古墳（百メートル、前方後円墳）、猫塚に次いで四番目の規模の古墳です。平成二十五年五月に元地権者から高松市に寄贈を受け、二十六年三月に市指定史跡となりました。

高松平野南部を代表する古墳として知られていながら、長らく本格的な調査の手は入れられていませんでしたが、平成三年十二月から四年

三谷石舟古墳の墳丘測量図（「三谷石船古墳測量調査報告書」より）

二月にかけて香川県立工芸高校郷土史クラブによって墳丘の測量調査が行われました。その所見によると、後円部は直径四十四メートル、高さ四・五メートルの二段築成、前方部は長さ四十四メートル、高さ三・六メートルの一段築成で、前方部が後円部の規模に比べて狭長かつ低平な特徴を持っています。古墳の北から東側にかけては石舟池の汀線となっており、この汀線付近には板石を数段平積みに積んだ石垣状の石列が断続的に確認されており、この段差はほぼ古墳の周囲を一巡しています。このことから、古墳の築造に合わせて、古墳を据えるための幅約五十八メートル、長さ約百メートルもの盾形の土台を造成しているのではないかと考えられています。

《出土遺物》

後円部のほぼ中央部には、「三谷石舟古墳」の名称の由来となった刳抜式石棺が露出しています。石棺は国分寺町鷲ノ山産の石英安山岩質凝灰岩で、棺身のみが露出して棺蓋はすでに失われているようです。埋葬施設も明らかではありません。石棺の長さ二・七七メートル、幅

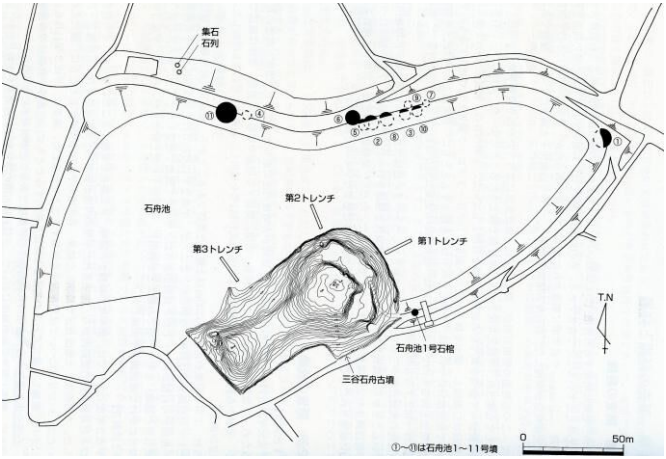
三谷石舟古墳後円部墳頂の刳抜式石棺

は〇・七九メートル、高さは〇・四二メートルを測り、足側の短側面には縄掛けの突起が残存しています。棺蓋との合わせ口のすぐ下に一条の突帯が縁と平行にめぐり、内側の頭部には馬蹄形の石枕が彫り付けられています。石棺の側壁は平たい棺底部からほぼ垂直に、箱形に立ち上がることから、鷲ノ山石棺群の中でも新しい様式に位置付けられており、古墳時代の中期前半頃の古墳と考えられています。

このほか、『木田郡誌』には、勾玉、埴輪、須恵器、切小玉の出土を伝えていますが、現在ではその詳細は明らかではありません。

6　石舟池古墳群

石舟池古墳群は、平成元年から五年にかけて施工された石舟池の堤防改修工事に伴って発見されました。石舟池の堤防斜面に埋もれていた円墳十一基と箱式石棺一基からなる古墳群です。



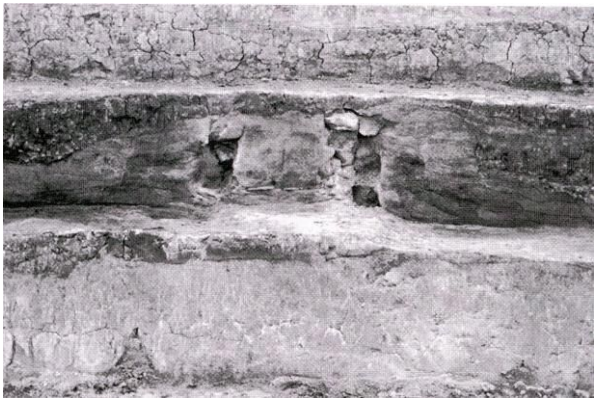
三谷石舟古墳と石船池古墳群

《石舟池一号石棺》

石舟池一号石棺は、石舟池堤防が三谷石舟古墳の後円部に取りつく付近で発見されました。後円部裾からの距離八メートル、堤防の上端から二メートル下がった池側斜面の中ほどです。箱式石棺の床面付近の一部が、棺長一・三メートル、棺幅二十五～三十センチの範囲だけ残存していました。遺物は確認されておらず、三谷石舟古墳に付属する埋葬施設と考えられます。

《石舟池一号墳》

石舟池の北東角、ちょうど堤防が市道に取りつく付近で、堤防の内側を削り取った法面に横穴式石室と墳丘の断面が、ちょうどお饅頭を二つ割りにしたような形で発見されました。断面にかかる石材は工事の掘削により多くが抜け落ちていましたが、横穴式石室は幅約八十センチ、高さは床面から六十センチまでの高さが残存しており、小児頭大の塊石で側壁を構築し床面に板石を敷き並べている様子が観察できました。側壁裏側の盛土には、約八十センチの幅で厚さ十センチご



三谷石舟１号墳の墳丘と石室の様子

とに土を丁寧に突き固めながら積み上げていった版築の痕跡と、さらにその外側に墳丘を形成する盛土が被せられた様子が確認でき、石室と墳丘の構築の過程を良好に観察することができました。また、法面前方の掘削地面には古墳の周溝の痕跡が黒い帯状に残されていて、これらから直径八～十メートルの規模の墳丘であったことがわかりました。

《石舟池二号墳》

二、三、五～十号墳の八基の古墳は一号墳から西へ九十メートルほど離れた、北側堤防の中ほどに密集して築かれていました。いずれも大きく削平を受けていて基底部付近の側壁と床面の一部が残されるのみでしたが、中でも石室の状況が比較的良好に残されていたのが二号墳と三号墳です。

石船池二号墳は墳裾と石室の掘り方及び床面の一部が残されており、横穴式石室を伴う直径九メートル前後の円墳と考えられます。石室は長さ二・六メートル以上、幅一・二メートルで南西方向に開口しています。床面は人頭大の塊石を敷き並べた上層と板石を二重に敷き並べた下層の二層構造になっていますが、時期差や追葬を示すものであるのかは明らかではありません。上層床石面から須恵器提瓶、下層床石面から鉄鏃と刀子、ガラス玉が出土しています。

《石舟池三号墳》

墳丘の北側の一部と石室の床面が残存していました。南へ下る斜面上に築造された直径六～七ｍの円墳と考えられます。石室は幅〇・八メートル、長さ二・二メートル以上を測り床面には安山岩の板石を二重に敷きつめています。須恵器杯蓋と提瓶、壺の底部が出土しています。

なお、古墳群中で最も残りがよかった三号墳は、調査の終了後に仏生山小学校に移築されることになりました。移築作業は当時の六年生も作業に参加して二日間をかけて完成し、現在でも郷土史の資料として在りし日の姿を見ることができます。

石舟池古墳群に共通にみられる、石室床面に安山岩の板石を敷き詰める構造は、このほかにも三渓小学校西側の平石上二号墳でも見ることができますが、高松平野全体ではどちらかというと少数派のグループに属します。安山岩の板石は地元で産出するものではなく、遠隔地から古墳築造のために運ばれてきたものとも考えられます。三谷石舟古墳にも、古墳が載るテラス状の土台の池側の段差には安山岩の板石積みの痕跡が見られます。安山岩石材を他地域から選択的に持ち込んで古墳を造るこだわりは、三谷地区の特徴といえるかもしれません。

7　石舟池

三谷石舟古墳の北から東側を抱き込むように瓢箪型の水面を見せている石舟池は、古墳の周濠と考えられてきました。北側から石舟池の堤防越しに眺められるうっそうとした墳丘の杜は、小ぶりながらも大和の天皇陵にも似たたたずまいがあり、まさに周濠をめぐらせた古墳の姿があります。しかし石舟池古墳群の発見によって、石舟池は三谷石舟古墳の周濠ではないことが明らかになりました。

石舟池は、貞享三年（一六八六）に成立した『翁嫗夜話』に、周辺の三谷陂（堤）、住蓮寺陂（堤）、砂入池、鯰越池、糠山池、唐谷池、菰池、小屋谷池、岡池、大谷池とともに三谷村内に所在するため池としてすでに名前が見えています。高松藩が文政元年（一八一八）にまとめた池泉合符録では、大池（三谷三郎池）の上揺に鯰越池水を加えたさらにその補助水源として蝙蝠池、大谷池、岡池石舟池が利用されていたとあります。昭和五十年の香川用水開通からは鯰越池を介して用水の供給を受けられるようになり、水不足の不安が解消されることとなりました。

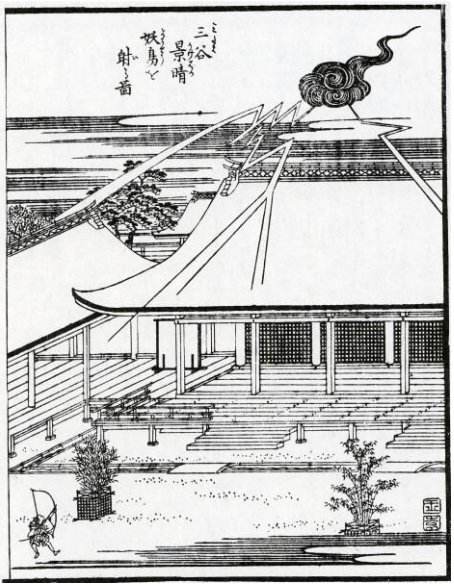
8　三谷兵庫守景晴、景久道入墓所

植田、三谷、神内、十河らの各氏は植田氏を筆頭に神櫛王の流れをくむと称する同

族で、ともに細川管領家の被官として山田郡内に割拠し勢力を張りました。このうち三谷氏は、三谷、池田を地盤に、三谷兵庫守影晴、影久道入墓所の辺りにあったとされる三谷城を居城とし、非常時の備えに上佐山の頂上にも堅固な山城を構えていました。

弥七郎景晴は永享（一四二九～一四四一）頃の人で、細川家に仕えて京都に在った時に、夜な夜な御所の殿上に飛び来る化鳥を弓で射落とした話が、三谷家の古老の話として『南海通記』に紹介されています。

また、景晴の子である兵庫頭景久は応仁の乱（一四六七～一四七七）後の武将で、堅城上佐山城に拠って寒川三谷合戦、香西三谷合戦など数々の戦をしのいで讃岐の戦国時代を生き抜きました。三谷氏が滅ぶのは、影久から二代後の兵庫頭景広の天正十年（一五八二）。長宗我部元親の四国統一の遠征軍によってのことです。



三谷景晴、妖鳥を射る図（讃岐国名勝図会）

9　三谷三郎池

寛永五年（一六二八）に生駒高俊の命を受けて、西嶋八兵衛が三谷三郎池の改修に着手したという記録が『翁嫗夜話』に見えています。西嶋八兵衛が工事半ばで満濃池の改修に携わることとなったため、三野四郎左衛門、匹田右近、浅田左京、下津平左衛門、平井勘兵衛らが普請を引き継ぎおよそ四か月後に完成させたということです。『全讃史』にも「・・旧、小陂池ありき。生駒高俊、西嶋之尤（ゆきなり）に命じて更に大いにせり。」とあり、もとからあった小池を拡張したものと考えられます。これによって、堤長百六間（百九十三メートル）、堤高九仞（ひろ）（十一～十二メートル）、根置四十六間（八十四メートル）、池周り一里一町（約四キロメートル）、池面積三十四町歩、貯水量五

上空から見た三谷三郎池・石船池の周辺

十九万トンの大池が出現し、三谷、上林、下林、上田井、六条、木太の各村の田畑を潤すこととなりました。

昭和四年には旱魃と増加する水需要への抜本的な対策として、県営用排水幹線改良事業による堤防の嵩上げと樋管、導水路の改修が行われ、貯水量は藩政時代のほぼ二倍にまで増加しました。

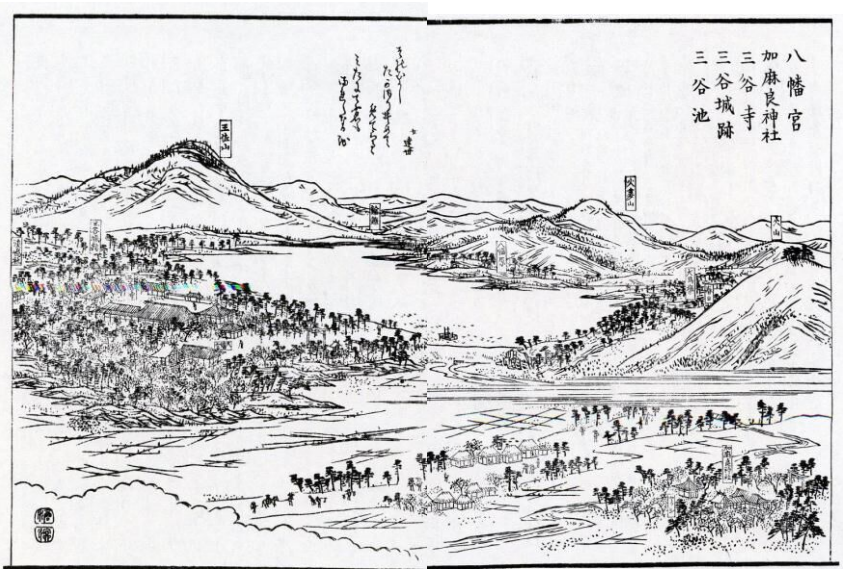
その後、昭和二十五年に掛け井出のコンクリート護岸工事（三谷三郎池は、貯水量に比して流入水量が絶対的に少ないため、川東下村の香東川取水口から開削水路によって給水していた）を行い、昭和五十年には待望の香川用水開通により用水からの直接供給が実現し、長年の旱魃の不安から解消されることとなりました。最近では、平成四年から九年にかけて大規模な導水路改良工事が施工されています。

１０　三谷八幡神社

天暦二年（九四八）に山田郡主であった小海基治という人物が、三谷村中州の地に三谷寺を創建し、寺の鎮守として八幡神社を勧請したという寺伝があり、一方『全讃史』には、これより先の延長年間（九二三～九三一）に三谷兵庫頭が火山の南に男山神（八幡神）を勧請して鬼門の鎮めとし、天暦年間（九四七～九五七）には僧堯存が

その祠を守っていたとの記述があります。当時は神仏習合の考えから、神と仏は姿を変えた同一の存在とみなされ、神社に付属した別当寺の僧侶が神社の祭祀にも与っていました。

三谷八幡神社は、誉田別命（ほんだわけ）、毘女大神（ひめおおかみ）、息長足毘女命（おきながたらしひめ）を祭神とし、三谷氏の厚い崇敬を受けてきました。永正五年（一五〇八）の香西三谷合戦で衰退しますが、その後天正年間（一五七三～九二）に僧宥泉によって再興されます。しかし元の神社地は現在よりもっと南側の中州にあったため寛永五年（一六二八）の西嶋八兵衛による三谷三郎池の築堤工事により池中に沈むこととなり、現在の地に遷座されました。江戸時代にも生駒家、松平家から厚く信仰を受けています。なお、三谷寺は明治時代に入って廃仏毀釈により廃寺と

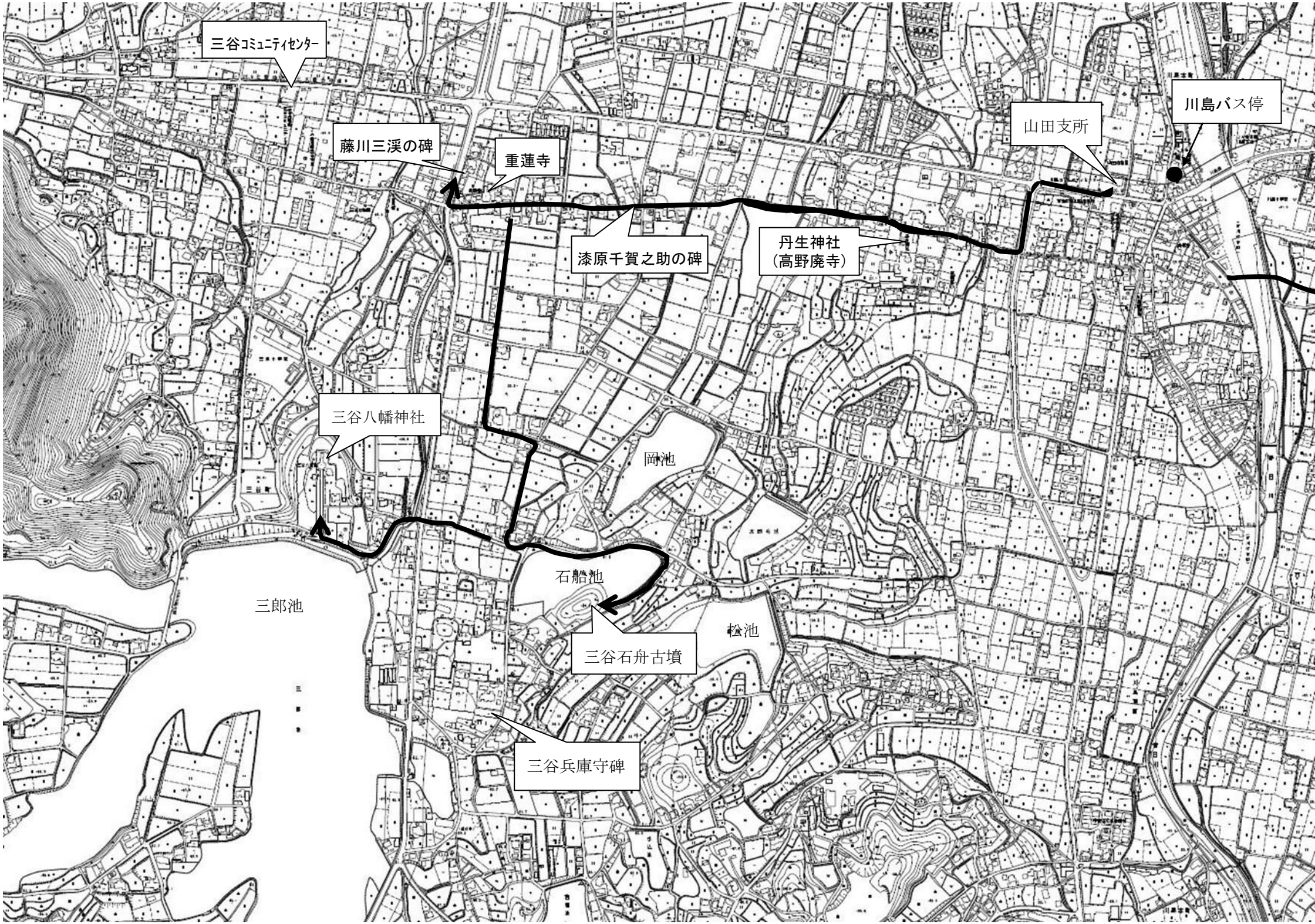


三谷池を取り巻く三谷八幡神社、三谷城、三谷寺（讃岐国名勝図会）

なっています。

参考文献

『三谷郷土史』昭和六十三年　三谷郷土史編集委員会編集発行
『讃岐のため池誌』平成十二年　同誌編さん委員会編　香川県農林水産部土地改良課出版
『香川県神社誌』昭和十三年　香川県神職会編　香川県神職会出版
藤井雄三「高松平野の古代社会」『讃岐国弘福寺領の調査』所収　平成四年
高松市教育委員会編集発行
『平石上二号墳・石舟池古墳群』平成十九年　高松市教育委員会編集発行
渡部明夫「四国の刳抜式石棺」平成六年　『古代文化第』四十六巻第六号
（通巻第四百二十五号）所収　財団法人古代学研究会
國木健司『三谷石舟古墳測量調査報告書』　平成四年　高松工芸高校郷土史研究会
西村尋文『讃岐国の南海道』平成二十三年　香川県埋蔵文化財センター考古学講座十六
『讃岐国山田郡三谷村漆原家文書目録』平成二年
瀬戸内海歴史民俗資料館歴史収蔵資料目録十四
秋山忠『古城跡を訪ねて』昭和五十七年　高松市歴史民俗協会・高松市文化財保護協会発行

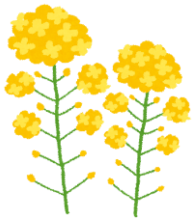

三谷コミュニティセンター
藤川三渓の碑
重蓮寺
山田支所
川島バス停
漆原千賀之助の碑
丹生神社
（高野廃寺）
三谷八幡神社
岡池
石船池
三郎池
松池
三谷石舟古墳
三谷兵庫守碑

４月１９日（日）　三谷町からの復路

◆ことでんバス＜瓦町・高松駅行き＞

（川島バス停）		（瓦町バス停）		（高松駅）
12：10 発	→	12：44	→	12：53 着
12：47 発	→	13：21	→	13：30 着

次回のふるさと探訪は・・・・



テ　ー　マ　松島町周辺を歩く（予定）

と　　き　平成２７年５月２４日（日）

９：３０～１２：００頃

集合場所　ことでん片原町駅

講　　師　穴吹 一雄さん（高松市文化財保護協会事務局次長）

☆広報「たかまつ」５月１５日号に開催案内を掲載しますので、ご覧ください。

☆小雨決行。警報発令等により中止の場合のみ、文化財課（TEL 839－2660「午前７時 30 分～開始時間まで」）でお知らせします。（電話が通じない場合は、「実施」です。）

★次回の交通案内★

◆ことでん電車	（高松築港）		（片原町）
〈長尾線下り〉	9：07 発	→	9：10 着
〈琴平線下り〉	9：15 発	→	9：17 着
	（瓦町）		（片原町）
〈高松築港行上り〉	9：19 発	→	9：21 着
〈高松築港行上り〉	9：23 発	→	9：25 着

「ふるさと探訪」に
参加される皆様へ

※　参加中は、次のことに充分留意し、
安全で意義のある探訪としましょう。

1　交通ルールを守り、交通安全を心がけましょう。
（必ず歩道を歩き、歩道が無いところでは、道路の端を一列で歩きましょう。）

2　無理をせず、体調には十分気をつけましょう。

3　引率者の指示に従い、整然と行動しましょう。

4　マナーを守り、他人に迷惑がかからないよう気をつけましょう。

5　文化財や自然を大切にしましょう。